（別紙4）　　平成　30　年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	4372700932		
法人名	社会福祉法人　成仁会		
事業所名	グループ　ホーム　みどり		
所在地	熊本県　阿蘇郡　西原村　布田　845		
自己評価作成日	平成31年1月15日	評価結果市町村受理日	平成31年3月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人　あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13－12－205
訪問調査日	平成31年1月31日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

広報誌「しあわせがいっぱい」は家族、地域に好評である。職員が入居者と楽しく生活する為の工夫と視点がある。喜びを共有することができる。職員は常に笑顔で入居者、家族とコミニュケーションがとれている。法人内の情報共有もスムーズにでき、相互交流が出来ている。職員は役職、資格にとらわれず業務が出来、問題意識を持ち意見を述べることができる。入居者は退去後の不安感が解消できるように支援体制がある。新規入居にあたっては本人と家族と信頼関係が早期に出来るよう対応している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

広大な敷地に建つホームは、先の熊本地震から立ち上がり、再び平穏な日々を取り戻している。村内出身の職員も多く、共通の話題でリビング内は盛り上がり、集団生活の賑やかさと至る所に置かれた椅子やソファでは、個別にゆっくりする場を提供しながら、穏やかな日常が展開されている。立地上近隣に民家が少なく、地域との日常的な交流は難しいが、隣接する特養施設での行事参加や、食材の受け取りにかごを持ってお邪魔するなど、お隣さんとしてのつながりを継続している。最終的に看取りまでの支援はしないものの、往診医との連携や、必要な時点で家族の意向を確認しながら、入退院を心配する家族の不安に寄り添い、レベル低下や重度化に向けた対応を慎重に検討している。基本的に入浴は毎日実施し、入居者との1対1の時間を大事にしながら、一日でも長いホーム生活を後押ししている。

Ⅴ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
			2. 少しずつ増えている
		○	3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての家族等が
		○	2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホーム内のケアにとどまらず、地域への貢献、信頼されるホーム作りを目指し、ガラス張りの運営を目標に実線している。	熊本地震で被害の大きかった地域であるが、まる3年を迎えようとしている現在、ホーム内は以前の落ち着いた生活を取り戻している。理念を基に年間計画を立てることで職員の目標をより身近にし、日々のケアに反映させながら振り返る機会を持ち、最終年度末に全職員で評価し、次年度に向けた新たな目標につなげている。	法人内で職員の部署異動が行われているが、グループホームは極力異動を控え、馴染みの職員との関りを大切にしている。新年度を前に1年のスタートとして、運営推進会議などでも地域へ向け理念の啓発に期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	従来の行事を通じて今迄通りの交流がある。地域のイベントには参加し交流している。	家族会で温泉旅行や食事会が企画され、家族間の交流が実現している。入居者全員が村内出身であり、地域のどんどやや隣町などへ初詣に出かけたり、地元企業の運動会には毎年参加している。小学生のワークキャンプや中学生の職場体験の受け入れも継続されており、子どもたちとのひと時は入居者の自然な笑顔を引き出し、広報誌でも紹介されている。広報誌（みどりだより）は、村内の物産館や役場に置かれ、情報発信の手段としている。	近くに民家は少なく、日常的な交流は望めないが、地域資源を活用しながら外出の機会としたり、隣接する特養ホームもお隣さんとして交流している。今後もこれまでの取組を継続し、更にホームにできることを検討いただきたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	家族会、毎月発行の新聞等で、情報を発信している。また、GHを実際に見学してもらい理解してもらえるようにPRをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ケ月毎に開催している。参加者の意見を取り入れサービスの向上につなげている。参加数が少ない為増やしていきたい。	2か月ごとの定期開催となっており、行政や家族、入居者が参加している。地域の代表として区長や民生委員に案内はしているものの、参加には至っていない。特養ホームとの合同開催の為、参加者がグループホームに立ち寄ることは無いようである。各事業所の状況報告や、法人関係者からの情報発信が行われている。	毎回でなくとも時にはホーム内を参加者に見てもらったり、地域代表者への案内の継続を期待したい。また、参加できなかった家族へ引き続き声かけと、議事録の開示方法については検討いただきたい。

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	村内行事に参加し協力関係が築けるようにしている。	運営推進会議に行政担当者が出席しており、ホームの現状を発信しながら村内の情報や行事の収集を行っている。管理者が地域包括センターの運営委員として行政に関わり、法人運営にも協力体制が活かされ、災害避難所として地域貢献を果たしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	徘徊で落ち着かれない時は一時的に施錠を行うが時間的ロックで対応できている。	法人の身体拘束委員会に管理者が入り、全体研修での復講や気づいたことはその都度提案しながら、話し合う体制を取っている。職員のメンタルについてストレスチェックの実施や、協力医師の助言が職員の精神面の支えとなり、何でも言い合える環境は、拘束や虐待の無いホーム運営に反映されている。居室での転倒防止にセンサーマットを使用している方もおられるが、プランに使用目的や継続の是非を盛り込み、家族の了承を得ている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	内部卒印体制お互い注意し合える職場風土作りに努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	学習機会は少ない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前の説明はもちろんの事、退居にあたっては、不安がないよう充分な説明と今後の対応について説明するようにしている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時の近況報告などで職員全員に話し易い様な雰囲気作りを行っている。また、ケアープラン説明の際にしっかり意見を聞くようにしている。	職員は日々の食事や入浴時やソファで寛いでいる入居者等に寄り添い、会話の中に聞きたいことを盛り込みながら意見を引き出している。家族の面会時には笑顔で接することを心掛け、ホームへの要望や入居者への対応について忌憚のない意見を求めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	常に意見を出しやすい環境である。意見や提案が上がりやすい様日頃よりコミュニケーションをとっている。	管理者はホーム会議での内容や入居者の状況、物品購入などについて法人会議に上げながら、職員の意向を伝えている。風通しのよい運営を心掛けており、職員は日々の気づきや要望をその都度出し合い、運営に反映させるように努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人全体に人事評価があり本人と上司が評価する仕組みがある。残業を減らす有給取得に努めている。資格取得に対する補助仕組みがある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内の勉強会の他、法人全体で勉強会を実施。外部研修の機会がある時には、研修扱いとし、順次職員を出せるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県、阿蘇ブロック会を通して、連絡、勉強会等の交流を図っている。その中で、事業所間の相互学習や訪問の機会を作るようにしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の意見や思いを聞きだせるよう努めている。又、初期ケアプランにも反映できるようにしている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に至るまでに行う面接の中で家族の意見も十分参考にしている。アセスメント作成には家族にも手伝って頂き必要なものは初期プランにも反映出来るようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	管理者と企画作成担当者が一緒に面談を行い現状の確認とその時の一番必要な支援を提案出来るようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気の中で、共に暮らし支えあう関係を心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日頃の面会時と年２回のカンファレンスに参加して頂くことでコミニュケーションを密にし家族からの信頼をもとに支援していくようにしている。		
20	（8）	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	定期的にドライブで故郷を訪れたり、地域行事への参加を支援している。	家族の協力を得たふるさと訪問や、地域資源を活用した買い物支援、どんどや参加など、入居者が生活圏としていた地域との関りが薄れないように支援している。地元職員との方言を交えた日々のやり取りからも、ホーム自体が馴染みの場所となっており、得意の歌や体操、洗濯たたみや食事への関わり等、趣味や特技が発揮できる機会を支えている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の場の雰囲気作りには努めているが、全て職員が介入するのではなく入居者にできる力があれば、利用者同士の支えあいを見守ることもある。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設の特養に異動された場合ケアプランを含めた情報の提供を行っている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の言動や暮らしぶりから本人の意向や希望を把握し、必要であればケアカンファレンス、ケアプランを活用し支援するようにしている。	職員は一日の中に入居者とゆっくり関わる時間を設け、ホームの暮らし方について、時に選択肢を投げかけながら思いを組み取っている。面会時に得た家族からの情報と擦り合わせながら、必要な内容をプランに繋いでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際は本人や家族、施設担当者から情報を得るようにし、アセスメント用紙を活用することでより深い情報を把握することができるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人の有する能力等の現状はアセスメントを使って把握するようにし、ケアカンファレンスや申し送りノートを活用し、職員間の相互理解に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	三ヶ月に一回のモニタリングの他、六ヶ月に一回のケアカンファレンスで職員間の意見を集約。半年に一度は家族、本人も交えカンファレンスチームとしての意見がケアプランに反映できるようにしている。	日頃の入居者の声を記録に残し、家族の意向を反映させながらプランを立案している。毎月の会議後には、数名ずつをモニタリングし、現状の確認や支援の継続、変更を見極め支援の評価を行っている。面会時等を利用し、家族の意向を更に確かめながら、プランの説明を行い了承を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録や申し送りノート、ケアカンファレンスの活用により情報の共有に努めている。また、モニタリング、ミーティングを活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご家族の面会やｻｰﾋﾞｽ担当者会議などを通し、意見や要望を取り入れている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	法人内の人的、物的、環境面の資源については広く活用、協働できている。現状の地域、社会資源のみでなく、新しく、資源の掘り起こしをしていくことが課題である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望等、必要性があれば以前からのかかりつけ医の受診を支援している。又、協力医療機関との連絡を密にし、適時、適切な医療が受けられるよう支援している。	入居時に協力医療機関の説明を行っており、本人・家族の了承のもと、全員がかかりつけ医として定期往診が行われている。また、専門医についも往診や職員による受診支援が行われている。職員はバイタルチェックや、日頃の関わりから異常の早期発見に努めており、気になることがあれば早めに主治医に連絡を行い、指示を仰いでいる。医療機関との連携は家族の安心に繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に行われる回診時には現状を伝え法人内の看護師と連携できるようにしている。特変時等は早急に報告し受診の有無の指示を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はサマリーを使用し、本人の認知面や行動状況について申し送りを徹底している。入院中も面会を多くし、本人の不安を減らすと共に、病院のスタッフと関係作りができるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入院時、カンファレンスの際に家族に対し急変時の延命処置、看取りについても聞き取りをおこなっている。	入居時に看取りや母体が特養であることの説明と、救急対応についてどこまで希望するのかなど、その時点での意向を書面で確認している。家族の思いは変化するものであると捉え、機会あるごとに今の思いを聞き取っている。重度化や終末期支援に関する研修会は、母体特養で行っており、職員も参加し、ホームに出来得る支援の重要性を再確認している。	ホームの浴槽は一般浴であり、浴槽のまたぎの可否を退居の目安としている。今後もホームに出来得る日々の支援に、全職員で取り組まれることを期待したい。

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変事のマニュアルを作成し、特養との連携で急変事に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者を配置し、火災や災害時の避難経路などの確保と、防火点検、隣接特養と合同で年2回の防火訓練とスッタフが自主的に行う防火訓練を行っている。	年2回、特養施設との合同で行う防火訓練と自主訓練を実施している。訓練には消防署の参加は得られていないが、防災業者の参加によりアドバイスを受けている。災害時の避難経路の確認に努める他、居室をはじめホーム内のコンセントなどの確認は、年2回のワックスがけで物品の移動をする際、集中して点検を行っている。	熊本地震ではホームも多大な被害を受けており、今後も火災と共に、自然災害のもたらす被害についても風化させない取り組みを期待したい。また、避難訓練には引き続き、家族の参加協力が得られるような働きかけを期待したい。
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー保護の為、排泄時、入浴時など一人ずつケアを行っている。又、声掛けも耳元で行っている。	入居者は人生の先輩であることを全職員で理解し、日々の支援にあったている。呼称は苗字にさん付けを基本とし、言葉使いも馴れ合いにならず、気づいたことがあれば、互いに注意し合える環境を作っている。身だしなみや整容についても家族の協力を得ながら実施しており、好みや季節に応じた衣服で過ごせるよう努めている。	居室へ入る際は、在室の有無に関わらず、今後も声掛けやノックの徹底に期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	定期的に利用者の得意な料理を一緒に作っている。 行事企画で外出の機会がある時は本人の希望に沿う様にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者になにか希望がある時は、話しを聞いて都度対応を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	御家族に協力頂き本人の好みの服を準備して頂き、着て頂いている方や職員で似合いそうな服を選び着て頂いている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	得意だった料理や昔ながらの調理方を日常会話の中で聞き出し、回数は少ないが行事企画し一緒に準備や食事を行っている。	献立作成や食材発注は法人栄養士や厨房で行っており、ホームでは調理のみ取り組んでいる。また、クッキングの日は食材の買い出しからホームで行い、おやつや団子汁などを作っている。。団子汁作りでは入居者も白い割烹着を身に着け、調理に励まれたようである。職員も入居者と一緒に同じものを摂ることで、会話も楽しみの一つになり、入居者の完食に繋がっている。こぼしがちな方へはエプロンではなく、タオルが使用されている。入居者は食後も下膳や食器を集める等、積極的に手伝っておられる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	本人の状態に合わせて水分量不足気味なときは、チェックをし必要分摂取していただいている。又、本人の嗜好を大切にし、お祝いや行事、普通の食事のﾒﾆｭｰに聞き取りをし、取り入れている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケア、義歯洗浄を行い口腔清潔に努めている。可能な限り自力にて行っていただいている。舌磨きも行っている。必要時、歯科と連携している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄パターンに合わせ、本人にあった方法で支援している。極力、普通の下着を使ってもらうようにしている。	一人ひとりの排泄パターンを共有し、日中は布パンツやリハビリパンツでトイレでの排泄を支援している。入居者は居室の近くのトイレを使い慣れており、自立の方も多いことから、物品の配置も歩行の妨げにならぬよう配慮している。極力布パンツを使用し、本人の尊厳を保ち不快の無く過ごせており、併せて家族の負担軽減にも繋がっている。排泄用品はホームで準備し、製品についても家族へ報告している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	年齢と共に排便コントロールが難しくなってきいている。個々に応じ施設用の散歩や体操をしたりしている。３日間排便見られない時は座薬を使用している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	ｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｰﾑでは、一人ひとりがいつでも入浴できるよう、体制を整えている。個々の気持ちを第1にくつろいだ気分で入浴して頂いている	毎日入浴の準備を行うことを開設時から継続しており、体調や希望にそって支援を行っている。浴槽や脱衣場は掃除や整頓が行き届き、気持ちよい入浴支援にも繋がっている。職員は見守りや介助を個々に応じ関心のある会話によって支援しており、思いや意向を把握する機会ともなっている。入浴回数も多いことから、多量の洗濯であるが、入居者も洗濯物たたみを慣れ親しんだ作業として一緒に行われている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠の際は清潔な寝具を使っていただけるよう定期的に洗濯、交換したものを使用。日中ソファーなどを活用し、リラックスできる環境づくりを心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	カルテに記入してある「くすりの説明書」をスタッフは必ず読んで内服薬を把握。一日分ずつセットし、毎食時、眠前と確認し、確実に内服行っている。内服に変更あれば記録し、申し送る。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人一人の意見を尊重し能力に合わせながら、居室の掃除や洗濯物たたみ、配膳などケアープランと連動し行っていただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節感を味わえる行事、ドライブへの外出は実施している。又、地域のイベント事へも参加している。	敷地内の散歩や庭先には寄贈された椅子が配置され、寛ぎながら外気浴が出来る環境である。ゴミ出しや法人に食材を受け取りに行くなど、継続して取組んでおり、入居者の出番の一つともなっている。初詣やどんどやなど季節の外出も入居者の状況を見て出かけている。自宅へ外泊をされる方はないが、正月に一時帰宅をされ家族との時間を過ごされた方もおられる。ホーム行事の中で、法人系列の宿泊施設で家族と一緒の食事会も継続して行われている。	外出支援をはじめホーム内の様子を掲載した広報誌は、家族にとっても楽しみとなっている。今後も来訪時の家族と散歩されるなど、身近な外出から協力を得られれるような働きかけを継続いただきたい。

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人の金銭所持が理想だが現状は難しく実践できていない。買い物等の際に支払いを一緒にすることなどで実感してもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の要望がある場合は、家族へ連絡を入れ、本人が家族と直接話を出来るよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	常に環境整備に努め、清潔感のあるリビングになるよう工夫している。季節の花や道具を使い、季節感が出るようにしている。	ホーム内は小まめな掃除や換気により臭気もなく気持ちよく過ごせる環境であり、家族や来訪者からも労いの言葉が届いている。リビング内には2台のテレビと見やすいように配置されたソファがあり、入居者はお気に入りの場所でテレビを楽しんだり、談笑する姿が見られた。季節の草花や飾り物に加え、庭先の樹木や花鉢が間近かに見える光景も、居心地の良さに繋がっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間には、間隔をあけてソファーを設置し、気の合う仲間と思い思いの場所でくつろがれている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族と相談の上で、本人や御家族の写真を飾ったり、本人の好む小物など設置し、居心地の良い環境を心がけている。	居室には小物や帽子、衣類をはじめ本人が使い慣れていた物や必要な物が家族との相談によって持ち込まれている。居室は広さもゆとりがあり、押入れも備わっていることから、スッキリとした居室が多いようである。衣替えは家族にも衣服の損傷の確認も兼ねてお願いしている。家族が困難な場合は、職員が衣類の購入なども代行している。	入居当初と経年によって本人にとっての居心地の良さも異なってくると思われる。今後も家族の協力や職員の工夫によって、その時々に応じた居心地の良い環境に取り組まれることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの身体機能に合わせた福祉用具を活用し、危険防止に努め、自分の力を生かし動けるように支援している		